

記念シンポジウム「災害と美術—ひとりの美術家の営みが問いかけるもの」

2012年1月15日 埼玉県立近代美術館

1991年6月、雲仙普賢岳の大火砕流被災を報道で知り、1992年から現地で残骸物の掘り出しや採取をおこないつつ、20年にわたって定点観測を続けてきた美術家大浦一志さん。自然の圧倒的なエネルギーと人間の営みの関わりを探る、その思索と行動と鎮魂のプロジェクトを紹介したのが「MOMASコレクションⅣ」の特集展示「大浦一志：自然と人間—雲仙普賢岳との20年」(1月7日～4月15日、常設展示室)です。それにあわせて1月15日に、原田光さん・本田雄峰さん・大浦一志さんを招いてシンポジウムを開催しました。

第1部では、趣旨説明に続いて大浦さんの活動や作品を映像で紹介し、その後3名の方がたに基調発表をお願いしました。原田さんは、昨年の3.11の東日本大震災で甚大な被害を受けた岩手県の県立美術館長の立場から、美術館と被災地を往還しながら感

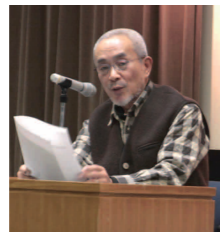


原田光さん

じられたことを率直に話されました。あの恐るべき大津波を目にした後に、果たして美術は可能かと改めて問い直し、また美術のありようや人間の共同体の必要性について考えをめぐらしたとのことでした。続いて本田さんは、被災当時の生なましい傷跡を伝える報道記事の紹介をまじえて、理事をされている施設のある南島原市が「警戒区域」指定の第一号となった当時の苦悩や、大災害を通して浮かび上がる地域や行政のさまざまな課題、現代社会や現代人の脆さへの懸念などを表



本田雄峰さん



大浦一志さん

明されました。大浦さんはなぜ、普賢岳被災の新聞報道に強い衝撃を受け、現地に赴いて20年余も関わることになったのかを中心

に語られました。情報化社会の中で、生きている実感の乏しさ、情報やイメージの手応えのなさを感じていたときに、あの自然のとてつもないエネルギーを受け止めた写真に出会い、「おまえは何を見ていたのか？ 現実の自然と向き合わなければ」と促されたそうです。

第2部では、基調発表をふまえて3名の方がたにディスカッションをしていただきました。その一部を紹介します——「中央と地方の依存的な関係や何もできない地域住民の姿など、平時には見えないことが災害時には見えてくる。」「自分の生活を自分で考えているか。状況に飲み込まれないで、個を大事にして主体的に関わっていくべきだ。再生のシンボルに



銀杏を植樹して並木を作ったり、ヒマワリの種をまいたりする運動も、そういう中から生まれて続いてきている。」「傍観者でなく、お互いが自立することだ。本気で関わるとは、汗と時間をその地に埋めることだ。」「『あなたは見ていません』と言われていたようで、自然には

いつも驚かされ、気付かされる。定点観測の意味すら崩れていくように思えてくる。」「記憶とは、非常にあいまいなもの。人間は、祭りやご神木やさまざまなかたちで思いを伝えてきたはず。それを私たちの世代の小さな視点で切ってしまうのか。」「20年前の火砕流

被災の地表の下に埋もれた、1万年前の縄文時代の地層に触れながら、現在の空を見る。それが普賢岳の、この現場に立った実感だ。」など、リアリティのある印象的な言葉がいくつも飛び交いました。詰めかけた来場者との意見交換も活発で、それぞれに思いを新たにする機会となりました。

中村誠(SMF事務局)

- 第1部：基調発表
「普賢岳の記憶をアートで綴る」(映像紹介)
「この震災に立ち尽くす」
原田光(岩手県立美術館館長)
「普賢災害から見てきた地域の課題」
本田雄峰(社会福祉法人山陰会 普賢学園理事)
「雲仙普賢岳との20年」
大浦一志(美術家 武蔵野美術大学教授)
- 第2部：パネルディスカッションと会場との意見交換
「災害と美術—ひとりの美術家の営みが問いかけるもの」
原田光 本田雄峰 大浦一志
[進行：中村誠(埼玉県立近代美術館)]

「Saitama Art Platform」(仮称) 設立準備アンケートから

今後、設立準備を進める予定の「Saitama Art Platform」(仮称)が、さまざまなニーズに対応してどのような役割を持ち、どのような組織によって運営されるべきか、また現在この事業に主として関わっているSMF(Saitama Muse Forum)と新たなPlatformとの関係はどうあるべきかなどについて、2011年10月から12月にかけて、埼玉県内で活動するさまざまな分野のアーティストや芸術系団体・NPOなどにアンケート票を送付し、アンケート調査への協力を依頼しました。アンケートは、次の3部に分けて構成しました。

- ①文化芸術を巡る環境と回答者自身の背景や現在の課題について
- ②「Saitama Art Platform (仮称)」の必要性と構想について
- ③SMFのこれまでの活動について

以下、そのアンケート結果の一部をご紹介します。

(詳細については、2012年4月にホームページで公開予定)

回答者は、個人では**62%**が「創作者・表現者」で、**30%**ほどが「コーディネーター」「サポーター」「芸術文化施設職員」「アトスペース等運営者」でした。また主として活動をおこなっているジャンルは、「美術」が**72%**で圧倒的に多くなっています。団体については会員数が「10～30人」が**20%**、「30～50人」が**28%**で、「100人未満」の団体が**80%**でした。多くの団体・個人が、文化芸術活動に対する環境整備や地域活動振興条件の最上位に「経済的な支援や助成制度の整備」を挙げていました。また国・県・市町村・財団などの各種助成を受けた実績のある団体は**40%**で、今回の回答者に実績や経験のある団体・個人が多かったのがうかがえます。その反映で、「他のアーティストや芸術団体とのコラボレーションの経験あり」が**50%**、「経験なし」と答えた団体の**65%**が「機会があればやりたい」と意欲的でした。NPOとの協働については、「経験あり」が全体の**32%**ですが、近年しだいに増加しつつあるようです。直面

している問題については、さまざまなご意見をいただきましたが、「制作・発表スペースの不足」がもっとも多く、そのための資金や予算の確保、助成などに高い関心を持っているところが目立ちました。また「職業としてアーティストをやっている人間は、意欲はあっても毎回のボランティアは経済的に無理。企画者はしっかりと予算の確保をし、協力者の善意に頼るだけではない運営を考えるべき」などの声もありました。

アート活動の基盤となるプラットフォームの必要性については**91%**が「必要・ぜひ必要」と回答し、期待される効果としては「連携・協働の促進」がもっとも多く、「問題共有による環境の改善、交流・ネットワーク・拠点づくり」などが上位に並びました。プラットフォームに期待される機能としては、「アート情報センターとしての機能」がもっとも多く、ついで「地域の芸術活動の総合調整機能」、「自治体や各機関との調整を図るコーディネート機能」に期待が集まりました。活性化のために必要な情報では、

「各種助成制度の情報」、「芸術家個人の活動情報」、「芸術資料アーカイブの情報」がトップ3となりましたが、「廃校や空きビルなどの空きスペースを一時的に活用した芸術文化活動の情報」や「芸術系NPO等の活動情報」にも関心が集まっていました。

SMFの活動の認知や参加については、回答者の**71%**が「知っていた」と答え、そのうち**40%**が「出展者やボランティアとして参加の経験がある」としています。将来の運営形態については「SMFが認定NPO法人となって運営すべき」が**41%**、次いで「県内の芸術関係者の新たな連合組織をつくって運営」が**27%**でした。メンバーシップ制にした場合の年会費については「個人3,000円」、「団体10,000円」というのがもっとも多い回答でした。

ご回答をいただきました皆様、ご協力たいへんありがとうございました。アンケート結果は次年度以降に活かしてまいります。今後ともよろしくお願いいたします。
小田浩子・中村誠(SMF事務局)